

# パーツやトランス結合など回路にこだわった 美しいデザインの300Bシングルアンプ

Text by 石原 俊 *Shun Ishihara*

Photo by 田代法生

## Profile

Commonsense Audio社は、アメリカのフルレンジスピーカーが有名なメーカーである。同社のオーナーであるデビッド・ディックス氏は、大のスピーカーマニアでもあり、ここで紹介する「Audio Nirvana 300B シングルアンプ」は、同氏の製作するフルレンジスピーカーや高効率スピーカーのために開発されたモデル。パワフルで、低域から高域まで幅広い帯域をスムーズに表現するシングルエンドの直熱3極管アンプである。



Commonsens Audio

# Audio Nirvana 300B

¥298,000(税別) プリメインアンプ

## トランス結合を採用した シンプルな回路のアンプ

本機は米国コモンセンス・オーディオ社の本格的な300Bシングルアンプである。米国の真空管アンプというとハイパワー機を想像してしまうが、本機はそうではない。本邦と同様、米国のオーディオ界にもいくつかの系列があって、本機はいわゆるハイエンドではなくヴィンテージ系に属しているようだ。

使用真空管は入力段が双三極管6N9P(6SL7)で、ドライバー段が同じく双三極管6N8P(6SN7)だ。終段の300BはPSVANE製でソケット側が白い磁器のタイトベースバージョンが奢られている。300Bはセルフバイアスで動作する。セルフバイアスは設計が非常に難しいのだが、バイアス調整が不要なのは真空管交換時に誠にありがたい。6N8P(6SN7)を出た信号は300Bに直接行くのではなく、いわゆる段間トランスを介して300Bをドライブする。段間トランスを用いた「トランス結合」のアンプは20世紀の前半にはよく見られた形式だが、多極管が一般

シングルアンプである。米国の真空管アンプといふとハイパワー機を想像してしまうが、本機はそうではない。本邦と同様、米国のオーディオ界にもいくつかの系列があって、本機はいわゆるハイエンドではなくヴィンテージ系に属しているようだ。

トランスを使用したことによる稠密感や、大型双三極管をもしかすると真空管アンプのパラダイムがトランス結合にシフトしているのかもしれない。本機は電源部も古典的で、整流管5AR4が使用されている。一般的にダイオード整流よりも真空管による整流のほうが音に力があるとされる。

### 解像度が高く力強さがあり 余裕のある音色を聴かせる



シャーシ上部に入力トランスを配置しているため、チョークトランスはシャーシ内にマウントされている



アナログ入力端子は3系統用意され、フロントのセレクタースイッチで切り替えることが可能

#### Specifications

- アンプ構成:300Bシングル ●使用真空管:6N9P(6SL7)×1、6N8P(6SN7)×1、300BX2、5AR4×1 ●定格出力:8W+8W(8Ω)
- 周波数特性:20Hz~20kHz(-1dB) ●入力感度:300mV~600mV ●入力端子:RCA×3 ●スピーカー出力インピーダンス:4、8Ω
- サイズ:255W×190H×450Dmm ●質量:24kg ●取り扱い:(株)横浜ベイサイドネット

化してからはずつかり廃れてしまった。それでも一部の自作家がこの形式のアンプを作り続けているが、ここ数年のうちにプロダクションモデルでの採用例を本機も含めて3例ほど見た。

もしかすると真空管アンプのパラダイムがトランス結合にシフトしているのかもしれない。本機は電源部も古典的で、整流管5AR4が使用されている。一般的にダイオード整流よりも真空

管による整流のほうが音に力があるとされる。

や勢いが違う。基本的には、ある意味素つもないが、品格が高いとも受け取れる300Bのキャラクターが支配的なサウンドである。だが、それだけではない。

段間トランスを使用したことによる稠密感や、大型双三極管を初段とドライバー段に起用したことによる瑞々しい表現を感じられ、総合的にみてもハイレベルなオーディオ・サウンドが享受できる。

サウンドステージはソリッドステート機のような広がりとは違いい、奥行き感が十分にあって、こちらから聴きに行かなくても楽器の前後関係が認識できる。音

解像度も上々だ。

クラシックではサウンドステージがスピーカーの左右に大きく広がった。どうやら本機は音楽のジャンルによつてサウンドステージを伸び縮みさせる能力があるようだ。一般的に300Bシングルは大規模な管弦楽曲には向かないと考えられているようだが、本機はPL200IIでも全く問題がなかつた。一度聴いてみていただきたい。

コモンセンス・オーディオ社は本機をフルレンジ式スピーカーもしくは高能率スピーカーのために開発したとアナウンスをしているが、今回は便宜上、PL200IIとの組み合わせを聴いた。

ヴァーカルは素直な表現を聴かせてくれる。人間の声の帯域は、さほど広くないから段間トランスによる解像度も上々だ。

ヴァーカルは素直な表現を聴かせてくれる。人間の声の帯域は、さほど広くないから段間トランスによる解像度も上々だ。

トランスによる稠密感は影をひそめ、透明な声が清潔な音場に響きわたる。音の浸透力は強く、声がリスニングポジションに飛んでくるような感覚も味わえる。